

「潮州十八音」について～“十五音”から“十八音”へ～

野間 晃

1. はじめに

福建・台湾の閩方言を記述した地方韻書は、いずれも十五声母の体系を持つことから“十五音”と総称されているが、広東の潮州方言を記述した地方韻書には、“十八音”と称するものがある。“十五音”においては、同じ調音部位を持つ、非鼻音と鼻音の声母のうち、[l/n]を“柳”、[b/m]を“文”または“門”、[g/ŋ]を“語”と、一つの代表字で示している。各組の声母は、韻母が鼻音化韻母であるときは声母も鼻音声母に、その他の場合は非鼻音声母になり、相補分布をなす。例えば、[nā : la]・[boŋ : moŋ]・[gua : ŋua]のうち、実際に存在するのは前者のみである。ところが潮州方言ではこの相補分布がくずれ、[lia : nia]・[buŋ : muŋ]・[gek : ŋek]の組み合わせ全てが存在するため、非鼻音と鼻音の声母をそれぞれ独立させ“十八音”とする必要があるのである。

上記の様な非鼻音と鼻音の声母を一つの声母代表字で示す方法に問題がない訳ではない。羅常培1930は次の通り指摘している：“[b][l][g]後面的韻母如果是從“陽韻”消變而成的半鼻音，固然除去本身鼻化而外還可以使前面的聲母鼻化而成[m][n][ŋ]，可是從“陰韻”消變而成的半鼻音，鼻化的力量並不如“陽韻”的強。牠們不單有時保持單純的口韻，甚至於前面的聲母也不受影響，所以Campbell（筆者比[ts][tsʰ]跟[t·][t·ʰ]的情形不同，并不是絕對不會在同一情境之下發現的。”（p.52）。すなわち、陰声韻が鼻音化した韻母は、陽声韻の韻尾が落ちて鼻音化された韻母よりも声母を鼻音化する力が小さく、場合によっては前の声母を鼻音化しないこともある。その結果例えば陰声韻の“麻”の字に対しては、『廈門音新字典』（W.Campbell編、1913年初版）において/ba・ma/という標記が存在しているのである。ゆえに、ローマ字や注音字母やカタカナなど、漢字によらない音韻標記法はいずれも、“十五音”の様に非鼻音と鼻音の声母を一つの符号で表すという方法はとらない。

初期の潮州方言韻書は、十五声母の体系を保っていたが、続いてその体系を守りながら、

注記によって十八声母の体系の反映を試みたと考えられる版本が現れ、その後すぐ“十八音”を標榜する版本が主流となった。林倫倫（編）1997の巻末“潮汕方言字典版本一覧表”によると、1913年には『潮声十五音』、1934年には『潮汕十七音』、そして1936年に『潮汕十八音』という版本が現れたことが分かる。ただ1937年に至ってもなお『潮語十五音』という名の版本が現れているが、この『潮語十五音』は本篇で述べる通り、十五声母の体系を守りながら、注記によって十八声母の体系の反映を試みたと考えられる版本である。

十五声母の体系は当時の潮州音系を反映していたものと考えられる。李新魁1993は、潮州音の特色を観察した鄭昌時著『韓江見聞録』の記述より、同書が著されたと思われる二百年前の潮州音の音系の再構築を試みている。鄭氏の記述は韻母に関するものであり、声母と声調について詳細に言及しようとはしなかったとするが、声母に関する記述より、当時の潮州音はいまだ15声母の体系を保っていたものであることが帰納されるとしており、潮州音が18声母の体系となったのはこれ以降であることが予想される。

十五声母が十八声母に変化してゆく軌跡をたどるには、各種版本の記述を整理した上で、方言調査を始めとする、共時的研究の諸業績を参照してゆくことが必要である。ここではその第一歩として、最新の“十八音”である『潮汕十八音字典』（楊揚堯編、2001年汕頭大学出版社）を探究の対象とした。

2. 附表の分析

本篇の附表は、『潮汕十八音字典』の各韻母が、“十五音”の“柳”・“文（門）”・“語”にあたる鼻音声母・非鼻音声母と音節をなすか否かについてまとめた音節表である。『潮汕十八音字典』のほか、参照した文献の詳細については附表の凡例に記した。この附表から読みとれる主要な特徴をあげると以下の通りである（韻母と韻母代表字の左上に小数字で示すその序列は、特記するもの以外『潮汕十八音字典』による）：

①声母による特徴

“語”は中古音の疑母に対応する。韻母によって非鼻音声母 g か鼻音声母 η のどちらかになることかがほぼ決まっている。 g と η が対立するのは³烏 ou は⁷歌 o ・¹⁸機 i ・²²經 $e\eta$ ・²⁶皆 ai ・²⁷佳 ia ・³⁴威 ui などであるが、³烏 ou は声符によって分かれており、²²經 $e\eta$ で g になるのは入声のみ、²⁷佳 ia は元々例字が極めて少なく、その他の韻母はごく少数の例を除いて η になる。

“来”は中古音の来母・泥母・娘母に対応する。多くの場合同じ韻母の前で非鼻音声母 l と鼻音声母 n が対立し、それらは³烏ou・⁷歌o・¹⁸機i・¹⁹交au・²⁶皆aiで見られる様に来母→l、泥・娘母→nという対応関係を持っているものが多い。

“文”は中古音の明母と微母に対応する。³烏ou・⁷歌o・¹⁴柯ua・¹⁸機i・¹⁹交au・²¹君uŋ・²⁸瓜ueなど、同じ韻母の前で非鼻音声母 b と鼻音声母 m が対立する例は多いが、明母と微母に対応するものではなく、対立の規則性を求めることは困難であるように見える。¹⁶観uaŋは舒声b、入声mになる。

②韻母による特徴

¹³甘am・¹⁶観uaŋ・¹⁶音im/iŋ・²²經eŋ・²⁹堅ieŋ/iaŋ/iam・³¹扛γŋなどから分かる通り陽声韻（入声韻）と音節をなす“語”はほぼ全てが鼻音声母ŋになるが、“来”や“文”ではこの様なはっきりとした傾向は見られない。鼻音化韻母には当然ながら鼻音声母が対応するが、例外として『潮汕十八音字典』には²⁴京iaNに“鯨liaN”の一字が収められている。同字は同書の対応する非鼻音韻母²⁷佳iaには見えず、『潮語十五音』でも³⁴京iaNに見られるが、『増三潮聲十五音』の²⁴京iaN・²⁷佳iaに相当する韻母には見えず、その音節の性質から存在自体が疑われる特異な読音であると言えよう。

③下位方言による特徴

¹³甘am・¹⁶観uaŋ・¹⁶音im/iŋ・²²經eŋ・²⁹堅ieŋ/iaŋ/iamのgとb、³⁴威uiのgなどの例から、他の下位方言では鼻音声母となっているものが、陸豊・南澳では非鼻音声母になっているものが多くみられ、この二地では声母鼻音化の度合いが低いことが分かる。これとは逆に、例字は少ないが¹⁰家eのŋ・¹²龜uのm・²¹君uŋのn（入声）・²⁹堅ieŋ/iaŋ/iamのm（入声）など、海豊では他の下位方言で非鼻音声母であるものが鼻音声母になっており、鼻音化の度合いが高い。“柳”については下位方言による特徴は見られない。

④一字多読

附表に示されている通り、¹⁶音の“密”[bit/mit]・¹⁹交の“鬧”[lau/nau]・²¹君の“吻”[buŋ/muŋ]・³⁴威の“魏”[gui/ŋui]の各字は、[]内に示す通り非鼻音声母と鼻音声母の両読を持っている。

⑤『潮語十五音』の注記“～訣（分）二音”

“柳訣（分）二音”の注記があるのは³烏ou・⁶優iu・⁷歌o・¹⁹交au・²²經eŋ・²⁶皆ai・³⁴威uiの7韻母であるが、『潮汕十八音字典』によると、そのうち⁶優・⁷歌・¹⁹交の3韻母では中古音の来母→l、泥・娘母→nという対応関係がある。例字は多くないが³烏・³⁴威にも同様の対応関係がある。²⁶皆のlは来母の字であるが、nには泥母のほか来母の字も少なくない。7韻母のうち²²經を除く6韻母は陰声韻であるが、それらに対応する

鼻音化韻母は『潮語十五音』・『潮汕十八音字典』では全く立てられていない。そのため『潮語十五音』ではそれを声母が鼻音化していることによって韻母の鼻音化も示そうとしたのであると考えられる。⁴鴉^a・¹⁸機ⁱ韻母では中古音の来母→l、泥・娘母→nとなるにもかかわらず、“柳訣（分）二音”の注記がないが、これらには対応する鼻音化韻母²⁵柑^{aN}・¹⁷天^{iN}（『潮語十五音』は³²柑・³⁶天）が立てられているからであると考えられる。⁸妖^{iou}・²¹君^{uk}（入声のみ）・²³蕉^{io}・²⁴京^{iaN}・²⁷佳^{ia}の5韻母もlともnとも音節をなすが、例字が極端に少ない。

“語訣（分）二音”の注記があるのは³烏^{ou}・⁷歌^o・¹⁰家^e・²²經^{eŋ}の4韻母であるが、『潮汕十八音字典』でnともŋとも音節をなすのはこれらの韻母（但し¹⁰家^eは海豊音のみ）と¹⁷天^{iN}のほかは、例字が極端に少ない¹⁹交^{au}・²⁶皆^{ai}・³⁴威^{ui}のみである。

“文訣（分）二音”の状況は“語”・“柳”とは異なる。この注記があるのは⁷歌^o・¹⁰家^e・¹³甘^{am}・²¹君^{uŋ}・²⁶皆^{ai}の5韻母のみであるが、『潮汕十八音字典』ではその他³烏^{ou}・¹⁴柯^{ua}・¹⁸機ⁱ・¹⁹交^{au}・²⁸瓜^{ue}・³⁴威^{ui}の6韻母も、bともmとも音節をなし、多くの例字があげられているからである。

3. まとめ

潮州方言においては、陽声韻およびそれに対応する入声韻が全て非鼻音声母および鼻音声母とそれぞれ音節を構成することになったため、十五声母の体系には収まり切れなくなった。『潮語十五音』の“～訣（分）二音”の注記と、『潮汕十八音字典』の記述する音系との比較から、“柳”がnとlに分かれる変化と“疑”がgとŋに分かれる変化は比較的早くから起きたため、分化の条件も比較的はっきりしているが、“文”がbとmに分かれる変化は例字が多いにもかかわらず、分化の条件もはっきりせず、一番新しく始まったものであると考えられる。そして一つの字が非鼻音声母と鼻音声母の両読を持つ例もあることから、分化の過程はいまだ進行中であることが予想される。また鼻音化の進度には、下位方言によって明らかな進度の差異が見られることが分かった。潮州方言における声母の鼻音化の進展については、今後下位方言の調査および各版本の比較研究によって更に詳細に探究されなければならない。

附表 『潮汕十八音字典』の各韻母と非鼻音声母・鼻音声母の音節表

凡例

(1) 韻母

- ・潮汕十八音：『潮汕十八音字典』。楊揚發編、528p.、2001年汕頭大學出版社発行。汕頭音を標準とし、「(2) 声母」で示す通りの下位方言音も収録する。18声母、36韻母。声母代表字・韻母代表字およびそれらの序列は、“十五音”の体系を忠実に守っている以下の二書とは大きく異なる。本音節表における標音は林倫倫/陳小楓1996（表中では林/陳1996と略称）によるが、鼻音化については音節末尾のNによって示す。一つの韻母に複数の標音があるのは、本書では所属字数の少ない鼻音化韻母または一部の下位方言でのみ用いられる韻母が、対応する非鼻音化韻母または汕頭方言における韻母に合併され、合併先の韻母において、個々の例に対し注記を加え本来の韻母を示すという、やや複雑な方式がとられているからである。表では韻母代表字の左上に小数字で序列を示す。右欄には以下の「雅俗通」・「潮語」・「増三潮」の対応する韻母を配する。
- ・雅俗通：『彙集雅俗通十五音全本』。民国44（1955）年台湾瑞成書局発行。洪惟仁1993の解題によれば、民国5（1916）年の版本があることが知られている。序と編者に関する記載はない。15声母、40韻母。韻母代表字は以下の「潮語」と共にほぼ“十五音”のものを踏襲している。韻母のうち、“堅”：“姜”、“干”：“江”、“關”：“光”の、本来韻尾で[-n]：[-ŋ]の対立を持つ三韻部には混同が起こっており、次の『潮語十五音』の37韻母に近づいたものとなっている。表では韻母代表字の左上に小数字で序列を示す。
- ・潮語：『潮語十五音』。全四巻。表紙に“民國三十七年訂正”と記された汕頭文明商務書館発行の版本。序と編者に関する記載はないが、内容から洪惟仁1993の解題のあげる、1911年出版の同書名・汕頭文明商務書局(マ)出版の蔣儒林編『潮語十五音』と同じ版本ではないかと思われる。15声母。韻母は巻頭に40あげられているが、最後の3韻母は巻末で“干部與江同 關部與光同 姜部與堅同 俱不録”とされ、実際は37韻母となっている。12韻母の初頭には“～訣(分)二音”(訣は声母を表す、～には声母代表字“柳”“文”“語”“英”“求”から一～三つの文字が入る)という注記があり、実際の18声母の体系を、15声母の枠組みのままで標記することを試みたものであると考えられる。本書の韻母代表字・序列については、「雅俗通」と異なる場合の

み、ノの後ろに記す。

- ・増三潮聲：『増三潮聲十五音』。謝益顯編、124p.、1965年著者（香港）出版。18声母。“十五音”に対して三声母を増加させたので“増三”と名乗る。韻母は56、管見の限りでは潮州系十五音の中で一番韻母の数が多い。韻母については、伝統的な配列方法を改め、開口呼→齊齒呼→合口呼→撮口呼の順に配列し、鼻音化韻母は対応する非鼻音化韻母の後ろに置いている。本書の音系の特色は、古い版本ですでに混同を起こしている [-n : -ŋ] と、一部の下位方言で混同のある [-m : -ŋ] の区別が保持されていること、注音から海豊・陸豊の音を反映していると考えられる韻部があることなどである。なお本書の音系の特徴については、野間2002を参照されたい。

(2) 音節表

『潮汕十八音字典』の韻母と、“十五音”の“語”“柳”“文”にあたる声母が結合した音節の有無を示す。○はその字が存在すること、△は一部下位方言に存在すること、(入)は入声の字のみであることを示し、その下に例字をあげる。例字の数が少ない場合はその旨を記した。〈 〉内は本書で用いられている下位方言地点の略称である：州＝潮州、澄＝澄海、饒＝饒平、南＝南澳、潮＝潮陽、普＝普寧、恵＝恵来、掲＝掲陽・掲西、陸＝陸豊、海＝海豊。

参考文献（附表および附表の凡例において引用したものを含む）

- ・羅常培1930：中央研究院歷史言語研究所集刊甲種之四 《廈門音系》 1930.
- ・李新魁1993：二百年前的潮州音 《汕頭大學學報》9-1. p.73～77 1993.
- ・李永明1959：『潮州方言』 中華書局 1959.4.
- ・洪惟仁1993：閩南語經典辭書彙編2《漳州方言字典》 武陵出版有限公司 1993.2.
- ・林倫倫（編）1997：《新編潮州音字典》
汕頭大學出版社 1997.3. 修訂本（1995. 第一版）
- ・林倫倫/陳小楓1996：《廣東閩方言語音研究》 汕頭大學出版社 1996.6.
- ・野間2002：潮州十五音初探～『増三潮聲十五音』の音系～
『第四臺灣語言及其教學國際研討會論文選集』p.613～633 2002.4.

表(1)

| 韻母 | | 声母 | | | |
|--------------------------------|---|--|--|---|--|
| 潮汕十八音 | 雅俗通潮語 | 增三潮聲 | 語 g : 俄 ɣ | 里 l : 彌 n | 無 b : 尋 m |
| ¹ 公 ou | ⁷ 公 | ⁵⁴ 翁 | × : × | ○ : × 龍農隆洛祿蘆 | × : ○ 某買摸蒙莫 |
| ² 鷄 oi | ¹³ 鷄 | ¹³ 街 | ○ : × 倪藝 | ○ : × | ○ : × 買賣 |
| ³ 烏 ou ouN | ¹¹ 孤 柳語喜 | ¹⁵ 烏 ¹⁰ 午 | ○ : ○ 吳蜈誤 : 午五偶 | ○ : ○ 鹵廬陋路 : 奴孛 | ○ : ○ 畝牡戊 : 某買蒙茂 |
| ⁴ 鴉 a | ²⁶ 膠 / ²⁸ 膠 | ¹ 亞 | × : ○ 樹牙 | ○ : ○ 拉刺臘 : 那拿 | ○ : ○ 肉猫 : 馬媽 |
| ⁵ 優 iu iuN | ^{30/29} 鳩 柳婁 | ³² 優 ³³ 幼 | × : × | ○ : ○ 柳流留 : 紐謬 | × : × |
| ⁶ 秧 ɣ | (なし) | ⁶ 秧 | × : × | × : × | × : × |
| ⁷ 歌 o | ¹⁵ 高 歌 柳文語 | ³ 窩 | ○ : ○ 驚娥 (以上のみ) : 愚俄悟 | ○ : ○ 羅裸螺落 : 努儒挪二 | ○ : ○ 母無磨帽 : 模魔毛募 望寞 |
| ⁸ 妖 iou 注1 iouN | ² 驢 (なし) | ³⁰ 妖 ³¹ 堯 | △ : ○ (陸海) 堯のみ | ○ : ○ 寮寥料 : 嫻 | × : ○ 秒苗 |
| ⁹ 乖 uai uaiN | ⁸ 乖 (なし) | ⁴³ 挖 ⁴⁴ 菓 | × : × | × : × | × : × |
| ¹⁰ 家 e | ^{24/23} 家 文語 | ⁷ 耶 | ○ : △ 牙衙 : (海) 雅のみ | ○ : × 歷麗 | ○ : ○ 馬麥 : 脈 |
| ¹¹ 居 ɣ | ³² 車 / ³¹ 居 | ⁵ 與 | ○ : × 語馭御 | ○ : × 你慮呂 | × : × |
| ¹² 龜 u | ^{27/26} 龜 | ²⁷ 呼 | ○ : △ 牛のみ (惠) 娛御禦 (潮普) 御禦馭 | ○ : × 虜魯 (潮普惠) 你 | ○ : △ 撫巫務霧 (海) 募 (惠海) 務 |
| ¹³ 甘 am 注2 aŋ | ¹⁹ 甘 ⁶ 江 文 | ¹⁷ 庵 ²¹ 紅 | △ : ○ (南) 眼言 : 眼巖言彦 (海) 嶽樂 : am 嶽 (陸南) am 巖 | ○ : ○ 籠囊難六 : am 覽人 (州南隴隴) 南男焚藍 am 南男藍 訥捺 | (入) : ○ 木墨のみ : 挽忙夢優 (南) 挽忙 : 目 (陸南) 盲慢夢 |
| ¹⁴ 柯 ua | ²⁰ 柯 | ⁴¹ 娃 | ○ : × 外のみ | ○ : × 頼辣籛攞 | ○ : ○ 抹撥磨磨のみ 麻蔴蔴磨のみ |
| ¹⁵ 觀 uɑŋ (潮 uɑŋ) | ^{39/10} 光 ^{10/39} 關 | ⁵² 汪 ⁵¹ 灣 | △ : ○ (陸南) 原 : 頑顏原願 | ○ : △ 暖戀亂 (以下のみ) (揚潮普惠海) 暖 | ○ : (入) 妄漫忘萬 : 芥末抹抹 |
| ¹⁶ 音 im 注2 iŋ | ³ 金 ¹⁷ 斤 | ³⁵ 音 ³⁶ 因 | △ : ○ (陸南) 根銀 : im 吟岑 (南) 銀 : (潮普惠海) 根 (陸) im 吟 銀 | ○ : (入) 隣聯 ip 立 : 您 ip 捏 im 凜林 (澄) 凜林 | (入) : ○ 蜜 : 免眼面蜜 (南) 眠密 |
| ¹⁷ 天 iN | ^{38/36} 天 | ²⁵ 以 | × : △ (揚潮普) 院硯のみ | × : ○ 拈乳染年 | × : ○ 綿麵 |
| ¹⁸ 機 i | ^{29/28} 枝 | ¹⁸ 機 | ○ : ○ 疑 : 議宜猊義 | ○ : ○ 里麗離厲 : 補餌泥 | ○ : ○ 米未篋 : 迷糜謎 |

1 「潮州話拼音方案」は iou、林陳 1996 の標音は iau。『潮汕十八音字典』巻末には“iou 韻、除汕頭、潮安、澄海外、其他各縣市都唸iao。”とあり、李永明『潮州方言』(1959) p. 2には、“古音效開三宵、開四蕭、潮主要是[ieu]、澄海、饒平主要是[iou]、其他各県主要是 [iau]。”とある。
2 澄海などでは-m は-aに合流する。注記のない例字は¹³甘 : aŋ (ak)、¹⁶音 : iŋ (ik) に読まれる。

表(2)

| 韻 母 | | | 声 母 | | |
|---|--------------------------------------|--|---|---|--|
| 潮汕十八音 | 雅俗通 潮語 | 增三 潮聲 | 語 g : 俄 ŋ | 柳 l : 彌 n | 無 b : 尋 m |
| 1 ⁹ 交 au auN | 23/22交 柳 | 1 ³ 歐 4 ⁴ 好 | ○ : ○ 樂 : 釐着教樂 | ○ : ○ 老勞劉鬧 : 腦撓鬧 | ○ : ○ 猫毛矛冒 : 卯昂 |
| 2 ⁰ 張 ioN | 1 ⁸ 薑 | 2 ⁹ 鴛 | × : × | × : ○ 兩量梁讓 | × : × |
| 2 ¹ 君 uo | 1 ^君 文 | 5 ³ 君 | × : × | ○ : (入) 嫩倫律率 : 腩 (揭惠海)嫩 | ○ : ○ 蚊吻文聞 : 晚吻門紋 秦悶 : 沒 |
| 2 ² 經 eo | 9 ^經 柳語 | 3 ⁹ 英 | (入) : ○ 玉鈺獄のみ 迎凝逆のみ (陸南) 迎凝のみ | ○ : △(入) 鈴令能寧肋 : 肉匿溺 (揭潮普惠陸海) 能寧 | △ : ○ (陸南) 孟明 : 血猛 銘命、(揭) 蜜 : 明命 |
| 2 ³ 蕉 io | 35/35蕉 | 2 ⁸ 腰 | × : × | ○ : ○ 賂略のみ : 賑のみ | ○ : × 苗描廟 |
| 2 ⁴ 京 iaN | 35/34京 | 2 ⁷ 影 | × : × | ○ : ○ 鈴のみ : 嶺嶺寧寧甯のみ | × : ○ 名命のみ |
| 2 ⁵ 柑 aN | 33/32柑 | 2 ^掩 | × : × | × : ○ 攬籃籃 | × : × |
| 2 ⁶ 皆 ai aiN 4 ⁰ 開7 ⁹ 肩 | 1 ⁶ 皆 柳英文 | 9 ^哀 1 ⁰ 埃 | ○ : ○ 涯刈岸 : 碍(礙)のみ | ○ : ○ 來梨內賴 : 孀乃奈賴 | ○ : ○ 勿埋邁 : 眉 |
| 2 ⁷ 佳 ia | 5 ^佳 | 2 ⁶ 加 | ○以下のみ : ○以下のみ 雅(海)訝 : 訝迓訝那 | ○ : ○ 掠のみ : 鮎のみ | × : × |
| 2 ⁸ 瓜 ue ueN | 25/24瓜 (なし) | 4 ³ 鍋 4 ⁴ 每 | ○ : × 月襍 | × : ○ 餛 | ○ : ○ 美尾梅某襍 : 每妹魅物 |
| 2 ⁹ 堅 ieo ioŋ iam 註3 | 2 ^堅 22/21兼 | 3 ⁶ 淵 3 ⁷ 央 3 ⁴ 奄 | △ : ○ (陸) 言顏 : 研嗜驗虐 閩嚴 : iam:閩嚴業 (陸海) iab : 業(南) 研 iam 驗 | ○ : ○ 兩良梁連 : 粘斂斂涅攝 亮量杏練 : 廉念以上 iam 略列栗 : iam 臉iap粒(南) iam粘 | △ : ○ (南) 憫勉 : 沔冕憫勉 緬綿 : 敏緬綿 (陸南) 沔 : (海) 密 冕敏 : (潮普惠陸海) 滅 |
| 3 ⁰ 肩 oiN | (なし) | 1 ² 看 | × : ○ 研 | × : ○ 蓮棟 | × : × |
| 3 ¹ 扛 yo | 28/27扛 | 2 ⁸ 扛 | × : ○ 迄喫垠艱鄞器銀 | × : ○ 女軟郎卵浪 | △ : △ (陸) 金門(揭潮普惠) 晚門墨 |
| 3 ² 耕 eN | 3 ⁴ 更 3 ³ 庚 | 8 ^夜 | × : ○ 硬のみ | × : ○ 姪冷鬧 | × : ○ 猛芒冥盲罵 |
| 3 ³ 官 uaN | 31/30官 | 4 ² 鞍 | × : × | × : ○ 漿爛 | × : ○ 滿變 |
| 3 ⁴ 威 ui uiN | 4 ^規 柳求喜 (なし) | 4 ⁷ 威 4 ⁸ 危 | ○ : ○ 魏のみ : 危魏魏懸偽 (海) 危 : (普南惠) 魏 (陸海) 魏偽詭 | ○ : ○ 泉備雷泪類 : 餛のみ (海) 軟卵のみ | ○ : ○ ()のみ : 美微 (海) 門問 |
| 3 ⁵ 唔 m | (なし) | 1 ⁹ 姆 | × : × | × : × | × : × |
| 3 ⁶ 雍 ioŋ | 1 ⁴ 恭 | 5 ⁶ 雍 | × : △ (海) 玉のみ | △以下のみ : △ (海) 龍錄陸 : (海) 肉のみ | × : × |

3 本来は山撰の字が[ieŋ]、宕撰の字が[iaŋ]であるが、潮州以外の地では[iaŋ]に合流している。